

# 村史編さん資料の収集について

古文書

(五)

高宮昭夫

(会員・南海郡米水津村)



## 伊能忠敬九州測量日記(抄)

文化七年庚午歳(一八一〇)

△ 三月十三日

地松浦逗留測。(中略)

両手測初より雨ニ逢、測を残して帰宿。後手八九ツ前、  
先手八九ツ後ニ帰、終日雨。佐伯領米水津浦大庄屋御  
手洗与七郎来る。此夜小雨

△ 十九日

昨夜より今晝迄雨、六ツ後止。大曇天西北風見合、四  
ツ半頃、丹賀浦出立、後手我等下河辺、青木、上田平  
介中越浦字地下ノ鼻より山越し横切を米水津浦内小浦  
迄測二十一丁十一間、小浦の内櫛ノ浦ニテ小休、又小

浦より初、字珍崎迄測十五丁十七間、先手坂部、永井、  
篠田、箱田、長蔵米水津浦ノ内小浦より竹野浦、白浦、  
同枝田霍人家十軒同字黒鼻迄測一里十一丁五十九間。  
先手後手七ツ前米水津浦内色利浦へ着、米水津浦大庄  
屋止宿御手洗与七郎。米水津浦ハ惣名ニテ、色利浦大  
庄屋、浦白浦、竹野浦、小浦、宮野浦、五ヶ浦なり。  
此所医師池尾秀讓出る。(池岡周静の誤りか筆者)。  
入津浦庄屋富田達左衛門並浦江浦大庄屋御手洗嘉蔵來  
る。此夜晴天大風測量。

△ 廿日

朝晴天、大風、同所逗留。両手六ツ頃出立。下河辺、  
永井、篠田、平介、昨日の測終字黒鼻より初、即浦白  
浦、色利浦界、夫より色利浦字大内浦人家十軒、色利

浦本浦、同字閼網人家四軒、宮野浦、同字閼浦人家一軒、字岸ノ鼻まで測。即ち米水津浦入津浦界一里三十五丁二十四間五尺、青木、上田、箱田、長蔵、昨日測量、小浦字珍崎ちんばさより初、鯨ヶ浦迄測。一里十八丁十七間一尺両手共八ツ頃ニ帰宿。此夜晴天測量。

△ 廿一日

朝より晴天、同所逗留測。両手共、七ツ半後出立。我等下河辺、青木、箱田、長蔵、米水津浦梶寄浦界霍崎より初、逆測字元鼻ニテ手分と合測一里十四丁五間外ニ横嶋手分にて七丁五間三尺外難所百五十六間見切。永井、篠田、上田、平介、浦白浦字鯨ヶ浦より初、同字閼人家五軒猿戸を残し山越横切、峠ハ浦白浦、中越浦界中越浦字猿戸迄測、八丁廿四間三尺前日の残測ニ繫。夫より引帰し、猿戸より初、浦白浦字元ノ鼻ニテ手合へ合測、一里〇〇廿一間三尺外ニ横島半周を測、十二丁〇五間、合二十九丁五十五間三尺見切四丁両手合一周二十〇町二十九間三尺。両手共、八ツ頃ニ帰宿。此夜小雨、測量。

△ 廿二日

朝中晴、南風、六ツ頃両手共、米水津浦色利浦出立、乗船、(後略)

忠敬先生一行は、これより入津に向ったのであるが、此の測量は、先生の九州第二測量であって、此の前、豊前小倉で越年滞留十余日、文化七年(一八一〇)先生十六歳の正月十二日出発、豊前の海岸を西へ測進して、二十一日八屋、翌日中津に着き、進んで豊後に入り、二月七日杵築、十二日大分、それから佐賀閼を経て、二月鳩浦、ここで滞在して近海の島嶼を測り、併せて三月朔日、日食観測を準備したが、残念にも当日曇天で、雲間に僅に食象を見ただけであった。

三月三日から(七日佐伯城下に入る)佐伯沿海とその諸島を測りつつ南行したが、此の辺も出入が多いので、四月六日、日向の延岡にたどりつき、五月二十四日、鹿児島海岸に出たのである。

ここに記したのはその一コマ、私達の村の測量記である。  
山田平之丞 郷土ものがたり参照

伊能忠敬、文化七年の測量図は周知のところであるが

米水津村大庄屋の家屋解体前に調査した結果、伊能忠敬は、文化六年にも南海部の海岸を測量していた。

表紙には次のようになっている。

文化六巳年五月改之

白杵領境角崎より延岡領境

鶴戸崎鼻迄海岸測量並、御

佐伯領内瀬之記

米水津

勸農会

勸農会とは、米水津の大庄屋御手洗想太郎の号である。但し、その表紙では伊能忠敬来村とは限らない。そこで某先生の協力を得て、調査探求するうちに、佐藤蔵太郎著の「佐伯志」の鼻面という一編に、次のように書かれてあった。

佐伯町字大船繫の東海岸に在り、青山後に聳え、碧海前に湛へ、波光巒影相映ずる処、一根の危巖矗として高く半天に峙立す、巖心空虚にして輕帆其間を往来し、潮白鶴来りて魚鰕を諸汀に求め、潮来たれば緑波漲りて、嶄々岸角を洗う。涯上に小関を設けて鼻面番所と云う。文化六年己巳ノ年六年幕府の天文学士稻生勘解由、坂部

定兵衛の二氏沿岸測量の爲め佐伯に來り、此の景勝を一覽し、人に語りて曰、予等諸州を巡回し、各所の名城、勝地を目睹するもの鮮しとせず、されど絶景斯の如きの風致を觀るものなし、真に海内無比の勝地なりと、以て、當時如何に風光の明媚なりしかを想ひみるに足るべし、今や関舎廢たれ危巖毀たれ、風色當年の十一を存ずるもの無し、されど至竟の江山尚ほ風景たらざるものあり。

さて、米水津の勸農会（大庄屋御手洗想太郎）は、この時の測量を次のように写している。

- 一 九町拾三間八尺五寸
- 一 鼻面御番所下より吹浦塩迄尤塩屋村持
- 一 三拾町十三間九尺
- 一 吹浦
- 一 壱里拾貳町三十壱間壱尺
- 一 地松浦
- 一 貳拾三町廿九間五尺
- 一 沖松浦
- 一 六町廿一間四尺
- 一 桑ノ浦
- 一 壱里貳町廿三間六尺
- 一 日ノ浦
- 一 拾町三間五尺
- 一 帆波浦
- 一 三拾四丁拾四間三尺
- 一 鮪浦
- 一 壱里壱町四十七間七尺
- 一 羽出

一	壹里三拾三丁五十七間七尺	中越
一	壹里拾貳町四十間三尺	丹賀
一	壹里九丁十五間	梶よせ
一	拾貳里四町十間八尺	入津
一	九里二十二間	米水津
一	拾貳里廿九町六尺	蒲江
一	貳里廿三町四十九間七尺	大嶋
一	六里貳十九町壹間四尺	大入嶋

後略

表紙には、海岸線の「瀬」を調査した記録とあるが、米水津関係の「瀬」を記してみる。

- 一 長ばえ 金クリ瀬、赤瀬
- 一 小かへばえ キビガウラの瀬左右
- 一 鯛ばえ 久保浦サカミ瀬
- 一 松きり 小古浦マアミ瀬
- 一 □の瀬 スベ取りの瀬
- 一 ぎしの瀬 平ばえのサカミ瀬
- 一 越ノ浦 マアミ、サカミ瀬
- 一 松ノ下ノ瀬 マアミ、サカミ瀬

文化七年の本測量の前に、前年の六月に二人で（稲生坂部）測量と海岸線の瀬を事前調査していることが判明した。  
以上

注 幕府の天文学士稲生勘解由は、伊能忠敬であることと間違いはない。坂部定兵衛は、文化七年の測量にも参加している。

